

白神山地が世界自然遺産に登録された理由とは？

白神山地の 17,000 ヘクタールの保護地域は、人間の手がほとんど加えられておらず、東アジア最大のブナの原生林が残っている。気候や地形が生物多様性に与える影響は、白神山地の生態系の歴史や特徴によく表れている。

自然に保護された、回復力のある樹木

ブナの木は、最終氷期（12 万～1 万 1,500 年前）まで北極圏の大部分を覆っていた。地球の気温が下がるにつれ、北部地域は寒すぎてブナの森を維持できなくなった。そのため、ブナの木は南へ、より温暖な地域へと広がり、種子を散布して新たな森林を形成した。

この移動はヨーロッパ、北米などで起こったが、山脈などの自然の障害に阻まれることが多かった。対照的に、ブナ林は北日本の低地を南下し、九州まで広がることができた。1 万 1,500 年前に地球の気温が再び上昇すると、ここ白神山地にもブナ林が再び形成され、カタクリやクマゲラのような多様な動植物種が誕生したのである。

白神山地の切り立った斜面や深い溪谷は人間の居住に適しておらず、人々は狩猟や野生の食用植物を採取するためだけに森に入った。日本の他の地域では、ブナ林は伐採され、より収益性の高いスギ林に取って代わられた。しかし、白神山地は人里離れており、急峻な地形であるため、森の生態系はほとんど乱されることなく保たれてきたのだ。